

著者として日本の讀書界にも知られて居るアライズ卿(Lord Bryce)も居る。この人は蘇國との關係としては只アバザーンを選舉區として議會に席を占めたから此處に加へられたのであらう。更に誰も知らぬ者なき程に極東にも知られて居るグラドストーン(W. E. Gladstone)が居る。グラドストーンは生前常に彼の血液の一滴たりとも蘇國の血ならぬはなしと云つて居つた。詩人のイーターン(W. E. Aytoun)論説作家のスキス(Alexander Smith)大に關する單篇物「ラブとその友」(Rab and His Friends)にて屢學校などにて讀まる「シモン・ブラウン(Dr. John Brown)詩人小説家である「マクドナルド(Dr. George Macdonald)蘇國西高地を背景にしたロマンスの作家「ブラック(William Black)フォート氣分を高調して文名「フィオナ・マクドナルド(Fiona MacLeod)によつて知られてゐる「シャープ(William Sharp)最後に「ロドリック・ステvenson」が居る。以上は多少共に文學に關係した人々ばかりであるがその他に醫者として有名な人々、植物學者の「ブラウン(Brown)電氣學の大家「ケルヴィン(Lord Kelvin)地質學者の「ライエル(Sir Charles Lyell)靴直しをなしてゐたが自然科學者として名を成した「エドワード(Thomas Edward)造船學の大家「ネピア(David Napier)「フォオルスの鐵橋の設計者「アロル(Sir William Arrol)最後に「睡藥クロロフォームを發見して幾多の外科手術を受ける人々の苦痛を軽減して居る「シンプソン(Sir J. Y. Simpson)等數へ來れば應接に遑がな

い程名士が觀覽者を領縁の内から脱みつけてゐる。目も疲れ脚も疲れ果て、旅宿に歸れば多くの偉人に感壓されて夢圖かならずである。

## 新著紹介

### ○日本地形誌

辻村太郎著 菊版四五五頁 東京古今書院發行 二月 定價四圓二〇錢

一年餘の間翹望して居た日本地形誌が公にされた。「地形學」が出てからこの數年の間に地形學に關する知識は全日本に亘つて廣められ且つ深められた。而して今や日本の地形を基礎とした新しい地形學を纏めて載きたいといふ希望は「地形學」の著者の肩に誰れもが負はせて居た。我々地學愛好者は日本地形學を手にして巻を未だ開かざる前に先づ大きな感激と期待とに浸らざるを得ない。序から精讀してゆく。著者は地理學の分科中地誌の重大なるを説く、而して地形的地誌の方面に貢獻する爲めに茲に南日本に關する部分を發表されたのである。本書は地形論及地形集の二編から成る。地形論に於ては第一に南日本の地質構造上の諸論を釋いて地形の真相を窺ふ基礎的知識を供提して居る。第二章に於て南日本の肢節を細論し、以下主要な地形と其の成因を斷層地形、準平原、嶋弧の形成、地震帶及火山帶、地形發達、山形、谷形、海岸形及氷蝕形の題下に説いて居る。地形發達の章の如きは

内に地形學と地質學との範圍を明にされて居、且地質研究者をして如何なる問題が彼等の手に残されて居るかを明示して居る點などは讀者をして感佩させるものである。行文概して簡潔平易であつて前著地形學の難解だと云はれたのに比すべくもない。第一編を通じて著者の高張される點は日本の地形は斷層や隆起沈降やによつて其の大勢を支配されたものである。従つて浸蝕海蝕は、人の副因に過ぎないものであるといふ事實である。従つて考察の方法は地質學的論證に傾いて居る。第二編は南日本に於て各種の地形が現はれて居る箇所の五萬分の一地形圖を七萬五千分の一に縮小したカソト百三十四圖を挿入して之を縱横に説き去つた地形集である。著者の謙遜なる其の特種形の成因が不明な場合には必ず其の形態の因由は未だ明ならずと書いて、假りにも當簡法の説明を與へて居ないこの點に於ては著者の云はれる様に全く我等の問題集である。要するに本書は日本地形誌と題しても日本の地形的地誌ではなく、日本の地形を土臺とした地形學であつて曩日の「地形學」の第一續篇と見做すべきものである。「地形學」に於て地形學を窺知し得た者は須らくこの新しい快著によつて新興科學の趨勢を知ると共に地形圖によつて如何に我等の愛地心を増し得べきものであるかな知らねばならぬ。殊に地形集の插圖上に著者の指示に従つて鉛筆にて劃線し以て各様の形態を明察することは地學演習として此の上もない好き學習法である。紹介者は三日を費して此の演習を克明に行つてみて大に地形圖上作業の方法を習得した。本書は第一版である爲

め魯魚の謬が少くない。其の内でも送假名遣や用字の普通でないのは許すとて、一番變なのは主として記載である後篇の地形集に於て、説明中に我等地學耽溺者の一番關心を持つて居る地名が地形圖のと四十個所以上も違つて居ることである。地形論には地名をそんざいに取扱つてよいといふことは常識でも考へられない。甚しい二三例を舉げて見ると土佐の浦内灣が、其の東にあつて灣入の方向の直角に違つた浦戸灣になつて居たり、越前海岸の雨を祈るには神秘でなき過ぎるアマゴセ山が兩乞山に昇格したり、志摩の古和が紀伊になつたり、福山灣が廣島灣とあつたりして居る外、五萬分の一地形圖を切斷して截頭された註記の一部を見捨て、首のない地名を使用するなどとは谷の爭奪の議論と大事な地名をこつちやにした恐れがある。かういふ學問上大したことでない瑕瑾を茲に擧げるのは旬日を出でずして第二第三の増刷を重むべき本書であつて見ればすぐと紙型を直して正しいものが弘め得られるからである。紹介者の望む所は北日本並に朝鮮及臺灣の地形を基礎とした地形學が引續いて本書の著者によつて著されんことである。日本地形誌の通覽によつて紹介者の獲た學習について御禮を申上げると共に著者の第二の名著出現を慶賀し、併せて地學愛好者は地理學家といはず地質學家も亦必讀すべきであることを茲に提唱する。終りに妄評の部分は著者の寛恕を乞ふ次第である。(N)

○世界地理風俗大系 アメリカ合衆國(上) 東京

新光社發行 昭和三年十一月 預約價金二圓八〇錢

本篇はアメリカ合衆國の總説と東部に關するもので、執筆者は渡邊萬次郎、新渡戸稻造、太田正孝の三博士を初め、鶴見祐輔、神川彦松、大山卯次郎、平井正之、水野恭介、淺野一男、宮武繁諸氏のアメリカ通である。寫眞版の豊富なことにはイタリヤ篇に劣る所がなく、且つ明瞭な地圖が數葉あることは地理を知得する上に甚だ便利である。たゞ寫眞版を増さんか爲めか同じもの違つた寫眞又は同種類のものが多く押入してあるのはうるさい。寫眞を精選すれば觀る者の感じを強くするので効果が大きくなる。發行は遅れても編纂の確乎たることをこの良き出版物の爲めに望んで止まない。然しこの一篇を以てアメリカに關する地理風俗の概念は充分に獲得することが出来る。(N)

### ○人文地理學講義(上卷) 西龜正夫著 古今書院發行

定價三圓四十錢

著者は廣島第二中學校の校長である。予は著者と面識がないが、古く歴史と地理や、地球誌上での、誌友である。篤學の人である。人文地理に關した論文を書かれるので、記憶を逸しない人である。昨年末に近刊としての廣告が出た時から刮目して之を見んことを欲したところ、この一月の十五日いかにも芽出度い目に、本書が生れた。同君の獨力苦學の半生に對して篤い敬意を表し、併せて本書の出現を祝福せずには居れない。本書は菊版四七一頁、序論と人類地理學、人口地

理學、生活地理學、交通地理學の四篇を收めてある。挿繪も四十一圖印刷も鮮明である。生活地理といふ語は聞く丈で生硬な感がある。けれども居住の外に飲食、衣服、光熱等を論じたから、致方がなかつたであらう。ハンチントンの人文地理學講話などに比べて本書の内容がいかにも廣く蒐集され説明されてゐることを知りうると同時に、あまりに廣きにすぎるといふ恨がないではない。しかし今日まで我等が手にした多くの人文地理學書、もしくは論説から、要を集め粹を抜いて、こゝまで簡明に纏めた著者の努力は多としなければならぬ。古い人生地理學から、最近の地理學評論に至るまで、凡そこの方面の文獻は、殆ど網羅されてゐる。中には「ア、かうしたこともいつか見たな」と、追回するやうな零細なことが記されてゐるので誠にうれしく懐かしい氣がする。單に零細なことはかりではない、必要な文字も集まつてゐることは勿論である。強て難をいふではないが、人類地理學の中にある「大和民族」の一章を例にとれば明かなやうに、結局多くの學説が簡単に紹介されてゐるに過ぎない程度であるのを恨みとする。しかし著者には別に人文地理學に對する體系があり抱負がある。讀者はさうした同君の態度から、多くの學ぶべきものを得るであらうことを信ずる。妄言多罪(藤田)

### 新著即報